

若手の会ワークショップ報告 ー被服領域ー

●テーマ：「家政学を活かす-家政学的な視点が企業で生きる-」

●日時 平成 18 年 5 月 28 日（日）15:00～16:00

●場所 秋田大学 教育文化学部 3 号館 150 教室

●講師

・ 吉崎 晶子 先生 ユニ・チャーム (株)

司会（西原）：

ユニ・チャーム株式会社 開発本部生活科学研究所の吉崎晶子さんにお越しいただきました。吉崎さんは、お茶の水女子大学人間文化研究科の修士課程を修了されました。学生時代は、家政学の中でも特に、被服衛生、運動生理学の分野を学ばれています。

まず、現在のお仕事内容を伺いたいと思います。

吉崎：

現在の仕事内容を簡単に申しますと、生活の中の問題点を発見し、解決手段を探り、商品の機能に落とし込むというような仕事をしています。

（具体的に、オムツを例にとり、商品開発の際の家政学的な視点を説明していただく。フリップおよびいくつかのオムツサンプルを参照しながら。）

まず、紙おむつの機能については 2 つ挙げられます。一つめは尿や便を吸収する機能。いわばウェアラブルトイレです。二つめは、衣服としての機能です。こちらに、ユニ・チャーム（以下；UC）が行ってきた、紙おむつ開発アプローチを衣服学的に整理してみました。

まず、衣服の役割としては、保健性と審美性に分けられます。

保健性の中には体温調節補助、動作への適応、身体の清浄などが挙げられます。

紙おむつにおける体温調節の補助に関しては、現在では紙オムツ内の温湿度の適正化という取り組みが行われています。この点については、高湿度化を抑制するための高分子吸収体や透湿フィルムの採用というように、紙おむつの歴史（といっても 25 年程度であるが）の中でもわりと以前より取り組みが行われていました。

動作への適応に関しては、オムツ全体のフォルムや部分的な資材物性が影響します。特に赤ちゃんにとっては、発達段階においてよく動かしてあげることが重要であるから、赤ちゃ

んの動きを妨げるようなものはいけません。生後間もない赤ちゃんは股関節も柔らかいために、M字に開いているが、成長し2足歩行へ移行するに従って、足が閉じてきます。そのため、つかまり立ちする前後で股間部の吸収体の形を変えて、赤ちゃんの動きやすいものにしていきます。

身体の清浄に関しては、UCとしては今回新たに、衛生的なアプローチを行っております。尿や便から皮膚を清潔に守ることは、オムツカブレなどのトラブルを防ぐことで重要ですが、布オムツと比較して紙おむつの性能は、そういった点では数段上回っています。しかし、赤ちゃんは非常に汗っかきであるにもかかわらず、紙おむつは、尿便をしっかり吸収するために腰部を閉鎖してしまっています。夏場の肌トラブルで1番多いものは、この汗によるあせもであり、お母さん達はあせもケアの為に、日に数回、赤ちゃんをシャワーしているのが現状です。UCでは、あせもは、滞留した汗が汗管につまり、細菌が繁殖することによって発生することをあきらかにしました（これについては、今年の感染症学会などで発表している）。従来は、汗を透湿させるという方法でしか提案できていなかったが、それでも処理しきれないほどの汗を赤ちゃんはかいています。そこで、透湿では追いつけない汗の処理を、素早く大量に吸収できるシートを開発しました。さらに吸収された汗から細菌が繁殖しにくいように抗菌性も付与しました。（この効果については今年の小児皮膚科学会などで発表している）。

このような保健性に関しては、総合的に快適性として現在も、衣服業界で検討が盛んに行われています。古くから行われてきた材料学と比較して、構成学・衛生的アプローチはまだ新しく、今後発展の可能性も大いにあると考えています。

審美性については、主にキャラクターの付与という観点から取り組んでいます。人気キャラクターを採用するところもあれば、自社で開発したキャラクターを採用しているところもあります。

このように、被服学的観点から、紙おむつの開発についてまとめてみました。商品設計—製造—評価—商品設計のサイクルを効率よくまわすうえで、被服学的知識を持っていること、また被服学的観点から考えられるということは、現在の私の強みにもなっていると思います。

司会：

オムツという商品の中に、被服の様々な学問的アプローチが集結しているのがよくわかりました。こういう開発はやはりチームで行うのでしょうか？チームである場合、どこの分野の出身の方が多のでしょうか？

吉崎：

材料学をはじめとした工学、理学、農学の出身の方などがいます。家政学出身者は比較的少ないのですが、生活に密着した視点、モノだけでなく人間との関係の部分に視点を持っているのが大きな特徴です。日常生活で使用するもの、人間が着用するもの、という商品開発では、このような視点は不可欠かつ重要度をましており、家政学出身者の大きな強みではないかと思います。

司会：

商品開発の場合、問題点をみつけ、その解決法を、実際の機能に落とし込む、というお話しでしたが、そうやって開発した商品が市場にでたあと、フィードバック等はあるのでしょうか？

吉崎：

お客様相談室などにご意見やご感想等が寄せられるので、それらを参考にすることがあります。また、市場に出る前ですが、モニターにご意見を伺うなども行っています。今日紹介した赤ちゃん用のオムツなどでは、赤ちゃんのお母さんにご意見を伺うことが多いです。

司会：

企業に入ってから学生の頃にはわからなかったけれども、新たに得た視点はありますか？

吉崎：

計画の重要性です。企業では特に「時間」の制約がありますから、そのタイミングにあわせて成果を挙げていくことが求められます。たとえば、季節ものの商品の場合は、商品販売のタイミングを逃すわけにはいきません。いかに研究計画を良いものにし、効率よく進めていくか、ということの重要性を強く感じました。

司会：

大学等の家政学の授業で、どのような授業内容・視点があると仕事に役立つと思いますか？

大学で習ったことをそのまま企業で役立てることができる人は、そうそう多くないかと思います。企業に入ってから力をつけることも多くあると思います。そういう観点からは、家政学系の大学等ではぜひ、「いかに生活の中で問題点を発見するか」という視点や力を養うとよいのではないかと思います。そこが家政学の大きな強みになるかと思います。

この話題に関連し、フロアより、実際の大学教育の現場での問題点、悩みが挙げられた。生活自体に関心が希薄な学生が多かったり、基礎的な用語すら知らないという学生が多かったりという傾向がある。そのような学生に、どのように生活に関心を持ってもらうか、どのような授業展開がよいのか、という議論がおこった。また、最近の傾向としては、問題解決の際、すぐに即答を求めるような傾向があり、それではなかなか力がかからないのではないか、という意見があがった。家庭科教育の重要性にも話がおよんだ。たとえば、家庭科教育は、質の良い消費者の育成にもなるため、良い商品開発ができる企業が、きちんと評価されるためにも、重要なのではないか、などの意見を得た。

なお、途中、円滑に話を進めるために、簡単に参加者に、自己紹介（所属、分野）をしていただいた。被服の分野の参加者は、主に、大学関連の研究者および学生だった。

●まとめ

「家政学」の視点は、人間生活に密着した部分に大きな特徴があり、吉崎氏のオムツの商品開発の具体的な話から、その強みを活かしている事例をうかがうことができた。家政学の教育に求められるものとして、実際の生活から問題点を発見し、解決しようとする力を育成するような視点を大切にするとよいのではないかとのご意見をいただいた。また、それを商品としての機能に落とし込むときに必要となる、基礎力養成も同時に求められているのではないかと感じた。

今回のワークショップでは、企業側の視点、大学側の視点、あるいは研究者の視点、学生の視点など、様々な視点から「家政学」を語り合うことにより、それぞれの立場からだけでは得られないようなヒントや意見が得られた。今後、学会が、ますます大学、企業などの情報交換のきっかけの場となることが、研究成果を社会に還元していくためにも期待されるだろう。